

# ニュージャージー日本人学校における国際理解教育の実践

前ニュージャージー日本人学校教諭

愛知県豊田市立青木小学校教諭 柴田 尚希

キーワード：在外教育施設、ニュージャージー、英語教育、国際理解教育

## 1. はじめに

世界各国から移民が集まるアメリカには、民族の数だけその文化が存在する。英語を学ぶ地域のESL (English as a Second Language) の授業に参加すれば、そこに集まった人々のバックグラウンドは多種多様である。つまり、現地で生活する子どもたちの周囲は国際理解を深めるチャンスであふれていると言える。在外教育施設における私たち教師の役割は、膨大な教育資源の中から教材を開発し、地域とつながり、子どもたちに学ぶ機会を提供することであると感じる。私たちが3年間、子どもたちと共に取り組んできたニュージャージー日本人学校での実践を以下にまとめる。

## 2. ニュージャージー日本人学校について

### (1) 概要

ニュージャージー日本人学校は、ニューヨーク日本人学校の分校として、1992年に教会の1部を借用して開校したPrivate Schoolである。校舎は、豊かな自然に囲まれた閑静な住宅街にあり、校舎前の広場やグラウンドには、リスやウサギ、シカなどの野生動物が数多く訪れる。在籍児童生徒は、多少の変動はあるものの、近年はおよそ50人程度が在籍している。ほぼ全員がバス通学であり、中には遠くニューヨーク州マンハッタン島からフェリー、バスと乗り継いで、片道1時間半ほどかけて登校する生徒もいた。

ニュージャージー日本人学校では、あらゆる教育活動の場で異年齢集団における縦割り活動を取り入れており、1年生から9年生までがまるで「一つの家族」のようにふれ合うことができる。子どもたちはそんな穏やかで温かい雰囲気に愛着を感じており、日々、円滑な人間関係を基盤に目を輝かせて学習や行事に取り組んでいる。

### (2) 子どもたち、保護者の願い

子どもたちの多くは駐在員家庭の子どもであるため、将来、日本へ帰国すること念頭におき、短い任期の中で「日本の学習指導要領で示された学習内容」と「現地校に劣らない英語力」の両方を習得することを目指している。中等部卒業後は、帰国子女として難関高等学校への進学を考えている家庭がほとんどで、日本人学校の教育に寄せられる期待はとて大きい。

特に、子どもも保護者も英語教育への関心が高く、英語圏で生活するからには英語を理解し、活用できるようになるのはもちろん、現地の文化に積極的に触れたいと考えている。子どもたちの英語力を測る指標の一つである英検においては、初等部高学年の過半数が準2級以上を取得（渡米歴3年以内）しているなど、学校または地域での学習の成果を発揮している。中には、小学校2年生で2級に合格する児童もいる。

## 3. 英語学習環境について

ニュージャージー日本人学校では、全学年、教科としての英語の授業とともに、ESLの授業をカリキュラムに組み込み、英語力の充実を図っている。ESLの授業は、習熟度別に行われており、「聞く」「話す」「読む」「書く」の4分野を発達段階に応じて系統的に学ぶ。その中で児童生徒が「生きた英語」を学ぶことができる特徴の

1つに「日本人への指導経験が豊富な米人講師（以下、ESL講師）による実践的な英語の授業」があり、子どもたちが学力の向上に努められる環境が整っている。さらに、全学年、専門性に優れた米人講師によるARTの授業にも取り組んでいる。また、養護教諭（非常勤）も米人であるため、怪我をした際の手当や身体検査を英語で行う。その際、英語初心者への対応として掲示物（英語とイラスト）を用いて、指をさしながらコミュニケーションをとれるように配慮しており、子どもたちの理解の手助けとなるよう工夫している。

#### (1) 初等部の英語学習

初等部1～3年生は、ESLを週4時間、4～6年生は週3時間に加え、各学年に英語活動（English Activity）の時間が設定されている。ESLでは、年度当初に学年別のPlacement Testを行い、1～3年と4～6年をそれぞれ3クラスと4クラスに習熟度別に編制している。クラス構成については、毎週火曜日の業間に行っているESLミーティング（4名のESL講師と2名の派遣教員）で児童の取り組みの様子を確認することで、年度途中でも上級クラスへ進級するという変更もあり得る。また、英語活動は学年ごとに行い、児童の習熟度は関係なくテーマに沿って学習を進めている（例：5年生は「ペーパーサートで英語劇に挑戦」や「一枚の犬の写真を元にどんな犬か特徴を紹介するビデオ収録」、「アメリカの州（State）に関連したゲームを他学年で紹介する」などの学習に取り組む）。評価については、「関心意欲」「聞く」「話す・書く」「アメリカ文化の理解」について4観点について3段階で評価している。所見は、ESL講師が英語で記述している。

#### (2) 中等部の英語学習

中等部は、2時間のESLと、教科としての英語が4時間（内1時間のTT【米人講師と派遣教員】を含む）の週6時間の英語学習を行っている。ESLは、習熟度別にLiterature、reading/writing、speaking/listening、beginnerの4クラスにわかれている（初等部と同じように、年度途中でも進級することがある）。教科としての英語は、ESLの講師と行うTTでは校外学習のテーマや各学年の英語力の実態の即した活動を行い、そのほかの授業では教科書の文法の定着を図りながら、発展的な活動ができるよう工夫をしている。

#### (3) 特色ある教育活動

##### ① 初等部「マニトー校との学校間交流」（11月と2月）

初等部は年2回（訪問、受け入れ）、地元オークランドにあるマニトー校と交流している。訪問時は、サンクスギビングデーの前日ということもあり、それに関係する言葉や要素が盛り込まれたビンゴやクラフト活動を体験させてもらった。受け入れ時は、日本の文化を相手校の児童に紹介し、体験してもらうため、「筆ペンを用いて漢字を書く体験」や「福笑い」の活動を用意した。



筆ペンを使って漢字を書き、本のしおりを作る活動

当日を迎えるまでに「どのように言葉をかけたら友達が活動内容を理解できるか」を各自が考え、ESL講師と相談しながら練習を積んだ。当日は、現地児童と英語を介して楽しそうに交流する子どもたちの姿が印象的だった。

##### ② 中等部「国連国際学校との学校間交流」（6月と2月）

中等部は年2回（訪問、受け入れ）国連国際学校と、さらに1回（訪問）、ラトガース校と交流している。特に、国連国際学校との交流では、訪問時は英語での自己紹介、クイズ、ゲームなどを通して、親睦を深めた。受け入れ時は、百人一首と折り紙の活動を取り入れた。

活動時は、生徒が主体となり、それまでの学習を生かしながらルールや折り方を英語で説明した。生徒

たちは日本の文化について、正確で、分かりやすく伝えるために準備、練習に励んだ。当日、国連国際学校の生徒が意欲的に活動してくれたことが、本校生徒たちにとって大きな喜びとなり、学びとなった。

### ③ ARTの授業

図工・美術にあたるARTの指導は、米人講師によって英語で行われる。日本から来たばかりの子どもたちも初めは戸惑うものの、制作活動をとおして次第に英語に慣れ、クオリティーの高い作品をつくり上げている。馬の絵を描く際は、講師が所有する本物の馬を学校に連れてきて、子どもたちが実物を間近で見たり、触れたりしながら制作にあたりすることもあった。また、ARTの授業は、初等部1年生で早くも色の三原色を学ぶなど、日本の同学年の児童生徒が体験できない技術を数多く学ぶことができるという魅力もあり、子どもたちに人気のある授業の1つである。

### ④学校行事

行事はバラエティーに富んでおり、アメリカならではのものとして挙げられるのが以下のものである。

- ・初等部6学年合同での移動教室「NJ州のヘブンヒルファーム」  
→ファームで秋の収穫祭の雰囲気存分に味わいながら、縦割り活動に取り組む。
- ・中等部3学年合同での校外学習「プリンストン大学、ラトガース大学訪問」  
→隔年で訪問先を変更。現地にて文化や歴史についての講義を受ける。
- ・6年生修学旅行「PA州のフィラデルフィア」  
→独立宣言採択、合衆国憲法制定がされた地でアメリカの建国の歴史を学ぶ。
- ・8年生修学旅行「MA州のボストン」  
→「清教徒が最初に入植した地であるプリマス」、「アメリカ独立戦争ゆかりの地であるボストン」、「ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学があるケンブリッジ」を訪れ、アメリカの昔、今、未来について考える。
- ・全校での「ハロウィンの仮装」「スキー教室」  
→仮装しながらの授業体験や、学校近くのゲレンデで2日間のスキー実習

これらの行事については、修学旅行こそ日系旅行社のサポートを受けることができるが、基本的には担任が事前に現地調査を行い、チケットの手配や現地スタッフとの打ち合わせを行う。

他にも、初等部の社会科見学では、「学校近隣の現地警察署・消防署」や「マンハッタンにある国連、総領事館」などを訪問している。子どもたちは、ニュージャージーだけでなく、近隣の州にある豊かな地域素材を活用しながら、アメリカ文化や国際社会について学んでいる。



学校から車で15分のところにあるゲレンデでのスキー実習

## 4. 成果と課題

子どもたちはニュージャージー日本人学校での学びを通して、英語という言語を学ぶだけでなく、アメリカという国の文化、風土を存分に味わい、学ぶことができている。そして、現地理解を深めるのと並行して、他

国から日本の今の姿を見つめ、今後求められるだろう在り方について考えることができていると感じた。子どもたちの成長を促す多角的なアプローチがしっかりと効果をもたらしているからだろう。また、近年、現地校を選択する家庭が増えてきている。より一層、授業内容の改善と行事の精選をしつつ、日本人学校の良さを広報していく必要がある。

## 5. おわりに

在外教育施設で過ごした3年間、常に子どもたちが国際的な視野を広げていけることを考えながら教材の開発等に当たってきた。多国籍国家アメリカで生きる人々、地域の教材との出会いはどれも素晴らしく、これから生きる子どもたちが多様性を認め合い、互いに高め合って生きていこうとするグローバル適応力を養う上で、確かな礎となったことだろう。ニュージャージー日本人学校の子どもたちが、これからも世界をつなぐ存在でい続けてくれることを願ってやまない。